雪にも負けず
～日本一の和紙職人を目指して～

名人　柏木　昭人(38)　岐阜県飛騨市
聞き手　中野　陽平　岐阜県立飛騨高山高等学校2年

平成18年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、23名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1. 三代目和紙職人

生まれてからずっとこの河合に住んどります。高校は高山工業を2年で中退して、この仕事に入ってきました。親父が病気やったで。昭和60年の11月頃に美濃市でちょっとだけ紙について勉強してきて、帰ってきた60年の12月25日ころからかな、紙漉きを始めたのが。親父もおじいさんも紙漉きをやっとって、俺は三代目としてやっとるんかな。それからずっと紙漉きを続けてやってきとったんやけど、今不景気やもんで他の仕事もやりながら紙漉きもやっとるって感じでやっとります。

2. 親の背中を見て

自分が子どもの頃は親が家で紙漉いとったんやけど、その頃はほんとに朝早くから夜の9時、10時まで紙漉いとったな。やで、仕事場で勉強を見てもらったりしたんやさ。昔から紙漉きの家に嫁に行くなっていわれるぐらい苦労せんならんかったで。最近はそんなことは無いけど。子どもの頃は軒数もけっこう多かったでな。競争も激しいし。冬場の仕事やで余計やったんかな。やもんでその時期にみんな一斉に紙漉きする訳やで。その間にどんだけ仕事して紙を売るかってことで夜遅くまで仕事しとったな。昔は全部の作業をうちでやっとったで4時頃までは紙漉きやらをして夜は8時頃まで楮たくり。自分の家は紙漉きやっとるんやけど、子どもの頃はほんとにこの仕事に関わっとらんで。見てはおるけど何か作業を手伝うってことは無かったな。将来は紙を漉かんならんのやなと思いかけたのは小学校5、6年の頃やろな。小学校の作文にも書いたっけな。

3. 職人の道へ…

高校を中退してから、どうしようかなぁと思って。家である程度のことは小さい頃から見てきとるでわかってはおるんやさ。わかってはおるけど、家に漉く場所が一つしかなかったもんで、そこで親父が漉いとるやろ。そうすると俺の練習する場所ってのが無いんやさ。やで、どっか行って習ってこんといかんなぁと思って、美濃市の紙業試験場っていう紙の試験をする県の施設があって、そこ行って紙漉きのことを勉強しようと思って。あそこに行けば紙漉きの道具もほとんどあるしさ。一月半ほど美濃に住み込みでおって、紙漉くこととか色つけることとか紙に関することを色々そこで勉強したんやさ。美濃で習ったのは理屈的なことやわな。だいたい家で見とるで作業的にはわかっとるで。あとは、例えば窯で煮るのに何%のソーダ灰を入れるとか、模様の入れ方とか色々勉強はしてきたな。やっぱこっちと向こうとはまた微妙に紙が違うもんで。そうすると使える技術と使えん技術があるんやさ。

紙漉の様子

山中和紙に書かれた和紙の歴史

4. 理に適った林産物

原料からってなると春から…まぁ一年中かけてつくっとる訳やな。林業の関係とはまたちょっと違って林産物ではあるんやけど。一応元が木やもんでな。一年一年ほんとに毎年苦労して育てていくんやけど、理に適ったものやと思うんやさ。昔の人がどうやって考えたかはわからんけど。普通の洋紙やと山の木を切って、パルプにして。木切るとでかくなるまでに何十年もかかるやろ。そやけどこの和紙になる原料は一年でもう採れるもんで。また春芽が出て、半年ほどで3メートルとか4メートルに伸びちゃう木やもんで。そう思うと最近の自然破壊の問題からいうと、非常に理に適っている林産物やな。自然を破壊せずに上手く調和しとる産業であると思うんやさ。それをなんとか後の世にも残っていけばと考えてはおるけど。普通の紙とは丈夫さも違うし、肌触りも違うし、色的にも微妙に違うし。一枚一枚同じものが無い。自然にやっとるやつやで一枚一枚がほんとに違うものなんやさ。まぁ草でも何でも紙にはなるでな。繊維があるものは紙になる。その中でも楮が一番紙に向いとるんやな。

楮にも種類があってな、この辺のは「まこぞ」っていう楮なんやけど。楮ってもんは山にもあるんやさ。自生しとるやつもあるし。このまこぞは皮が厚くて、繊維もたくさんとれるで理に適っとるんやさ。そやけど山にある「やます」って楮は皮が薄くて繊維が細かいんやさ。繊維が細かいってことはきれいな紙ができるんやさ。他のとこやと三椏とかも使うんやけど、うちは楮だけ使っとる。三椏も育たんことは無いんやけど、元々この辺には無いんかなぁ。その代わり楮はよく育つもんで。楮はくわ科の植物なんやさ。

5. 作業手順

❶**栽培**　楮の栽培は春先の草取りとか、ある程度伸びてくると芽をもがならんしな。まっすぐ一本の木にしたいもんで。枝の芽が出てくるで全部とっていかんと一本の楮にならんもんでな。そういう作業をして、ある程度でこうなりゃ後は伸びるで。ところあおいも自家栽培やで。これは、種まきして芽が出てから畑に一本一本植えてって、収穫時期は楮といっしょで10月の終わりぐらいから11月の初め頃やな。どこにでも生えとらんもんで。

ところあおいも根っこへ栄養がいくように花の咲く頃に芽を全部とってまうでな。上へ伸ばすんでなしに下へ伸ばしたいで。根っこがほしいんやさな。種とるやつだけ花を残しとくの。

❷**刈り取り**　刈り取りは、一本一本手作業で、最近ははさみもいいやつがあるで楽にはなってきたけど、一本ずつ切ってかならんでな。うちは1500キロほどかな。自分で栽培もしとるし、あとは町内とかから頼んであるで、そこから切ってもらったやつを買ってくるだけやで。窯に入るだけの長さに切りそろえて、それを窯に桶をかぶせて蒸し上げる。それを2時間半くらい蒸さなあかんのやさ。

❸**楮の皮はぎ**　秋の皮むきはこないだ終わったけど、そいつも一本一本手作業やもんで。昔やっとった人に頼んで7、8人ほどで皮むきをするんやさ。今年は4日かかったかな。その皮を天日で干して。雪が降ってきたらそれを水にもどして、水につけとくとやわらかくなるんで。

❹**楮たくり**　今度は雪が降ってくる頃に楮たくりっていって板の上に楮を広げて刃物で表面の黒い皮を一本一本こそぎとる作業をするんやさ。それは頼んでやってもらっとるんやけど。これも根気がいるわな。一本一本の仕事やで。

❺**雪ざらし**　そいつが終わるといよいよ雪ざらしな。楮の表面に残っとるのは緑素で、こいつを太陽の光によって分解する作業が雪ざらし。そいつはまた天気とのにらめっこやもんで。雪降ると埋まってまうで一箇所に寄せてまうんやさ。そうでないと雪降ったとき雪ん中に入るともうわからんようになってまうで。晴れとりゃ並べてそのまんま置いときゃいいんやけど。雪が降るってなると寄せてまわんならんで。12月に雪が降れば3月ぐらいまでやらんならんかな。楮を一回雪ざらしすると2週間ほどで白うはなるんやけど、次から次やろ。どっさり量があるもんで。そうするとやっぱ12月に始まっても3月くらいまではずっとやらんならんで。

❻**窯で煮る**　雪ざらしが終わってあとは乾燥する分と使ってく分とがあって、次は窯で原料を煮る作業やけど、ほんとに火をたくのが仕事みたいなもんやでな。乾燥したものを貯蔵しといて、今度紙を漉くときに貯蔵しといた白い皮をもどして窯で煮るわけなんやけど、そこでソーダ灰、炭酸ナトリウムを入れて2時間くらい煮込む。

❼**ちりより**　あとは窯で煮たやつを持ってきてごみ取り、ちりよりっていうんやけど。これも全部手作業で、水ん中に原料入れとってごみ取りやもんで、冬場の仕事は冷たいわな。水は流しっぱなしみたいな感じやで。冷たい作業やし、また根気がいるんやさ。一本一本残ったごみを取る作業やもんで。あれはほんとに一日中座ってやる仕事やで、ほんとに気が長くないとやっとれんでな。

❽**打解**　ごみを取ったら今度は、打解っていって叩いて細かくする作業やな。これは機械やけど。この仕事は機械に1時間かけて叩いて、10分おきぐらいに混ぜるんやさ。

❾**ビータ**　今度はビータでまた水と楮を攪拌して、ほんとにこどろとろにしてまう作業。水に溶けやすくなるもんで。

❿**紙漉き**　この状態で紙漉きのとこに持ってって、水と原料ととろろあおいを混ぜて、紙漉きになると。紙漉きは細かい作業やし、自分の感覚だけやで。厚さもそうやし原料の配分もとろろあおいの入れる量も自分の感覚で入れていかならん。微妙な自分の感覚の調整が大事やもんで。自分の勘だけを頼りに何もかもせなあかんで。その辺が難しいな。体調が悪けりゃ体調が悪いなりの紙しかできんし。

⓫**圧搾**　今漉いたのを明日午前中かけて水を切って、圧搾するんやさ。これはただ半日かけて搾ってくだけやでさほど難しい仕事ではないな。

⓬**乾燥**　一枚一枚重ねたのを一枚ずつめくって乾燥をしてくんやな。昔は板干して言って太陽の光で乾燥するんやったんやけど、冬場の仕事やろ。ここは冬場雪がようけ降るもんで天気の日が限られてくるんやな。そうすると乾燥できんで、今は熱を利用した乾燥機ってのができてきたもんで、それからずっとこの乾燥機を使って乾燥しとる。

⓭**選別**　乾燥してあとは最後に選別やな。良し悪しを乾燥しながら選別しとるって感じやな。傷の紙とかいい紙とかって分けて出荷する。

紙漉の様子

6. 喜びと苦労

この仕事の喜びはやっぱり自分が漉いた紙をお客さんが喜んで買っていってくれるのが一番の嬉しいことかな。難しいことは、紙を一日中漉いとるけど、朝漉いた紙とその日の夕方漉いた紙ってのはまた違うんやさ。その一日の中でも同じ紙ってのがまず無いくらい違う。均一になるようにと思ってやっとるけどやっぱ微妙に違ってくる。揃えるってことはほんとに難しい。一日でそんだけ違うで、今日と明日ではまた若干違うのよな。その辺が難しいわな。毎日毎日同じ紙を漉くのは至難の技やと思う。

山中和紙で作った製品

山中和紙によるあかりアート

7. 職人としての責任

この仕事を辞めようと思ったこともあるよ。この仕事は気候にも微妙に左右されるもんで。何年か前のことで、どんだけ漉いても紙が厚くならん年があった。何が原因なのかそれもはっきりわからんのやけど。ところあおいが冬の間やでよく効くんやけど、ところあおいを弱くすると紙にならんくて、ある程度ところあおいを入れると紙がうすくなってまうもんで、その調整をするんやけどどうしても厚くならん年があったんやさ。

そん時は注文受けとるんやけど、紙が厚くならんもんで。一月漉いても、二月漉いてもお客さんのところに出荷できんのやさ。そんな年があって、家で紙漉いとってもおふくろと喧嘩ばっかしとってな。薄いって文句言われるし。自分はその厚みで漉いとるつもりなんやけど、厚くならんくて。辞めてまいたいぐらいやった。でも、やっとる以上は、お客さんがおるでな。明日から辞めますって訳にはいかんやろ。注文がある以上は続けていかんならんと思っておるで。ほんとに何にも注文が来ないってことになれば、そん時はそん時かもしれんけど。一応注文がある以上は紙漉いていかんとなって思って。注文してもらえるんやでやっぱ辞める訳にはいかんと。これからも、細々やけどなんとかやっていければなぁと思っておるんや。

名人　柏木昭人（かしわぎ・あきと）さんのプロフィール
●生年月日：昭和43年5月19日生まれ
●出身地：岐阜県飛騨市
●仕事内容：高校を中退した後、美濃市に紙漉きの勉強に行き、17歳で親の跡を継ぐ。今現在は岐阜県河合町にある「山中工房」で地元の小・中学生や婦人会などを対象に紙漉きの体験や実演を行っている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
(社)岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】